

世界の バスケットリー × バスケットリーの 世界

アイヌのテンキとそのひろがり

齋藤 玲子

民博 学術資源研究開発センター

伝統的な暮らしにおいて、衣服や生活用具など、その素材の多くを自然のなかから手にいれてきたアイヌ。北太平洋沿岸の先住民にひろく利用されたテンキグサも、そうした素材のひとつである。今月はテンキグサを素材とする入れ物「テンキ」に注目し、アイヌのバスケットリー文化の一端を紹介する。

テンキグサ (*Lymnopus mollis*) という植物をご存じだろうか。別名ハマニンニクともいうが、ネギの仲間ではなく、海岸の砂浜に生育するイネ科の多年生草本である。北米とアジアの両大陸に分布し、日本では、太平洋側は関東以北、日本海側は九州北部まで見られ、これが南限とされている。

テンキグサを素材にしたバスケットリーは、千島列島の先、カムチャツカやアリューシャン列島、そして北米に至るまで、北太平洋沿岸の先住民にひろく使われてきた。一八〇一―一九世紀の民族誌にも記録され、実物も数多く残されている。

テンキグサという和名は、この草の葉を編んで作られた入れ物「テンキ」に由来するとされる。テンキ自体の語源については、知里真志保の『分類アイヌ語辞典第一巻植物篇』（日本常民文化研究所、一九五三年）に二説があげられており、旧アイヌ民族博物館のウェブサイトに「アイヌと自然デジタル図鑑」でも読むことができるので、関心のあ

るかたはご覧いただきたい。

アイヌのバスケットリー文化

アイヌの伝統的な生活は、衣服や住居をはじめ植物製の品々にあふれていた。植物素材を編み組みして作るバスケットリーにあたるものをあげると、家のなかにはござが敷き詰められ、簾や蓆もあちこちで使われた。北海道のアイヌ語でサラニブとよばれる袋は、運搬や貯蔵などに用いられ、大きさも製作技法も素材も多様であった。身につけるものではわらじのような履物があり、大きなものには魚を捕る罟や船の帆があった。素材は、シナノキ、オヒヨウ、ヤマブドウの樹皮、ガマやヨシ、オギなどが用いられた。

このようにさまざまなバスケットリーがあるなかで、じつは、テンキはアイヌの民具として一般的なものではなかった。収集地が明らかでないテンキは、ほとんどが千島のものである。千島アイヌは人口がら、試行錯誤を重ねて、復元に成功したのだ。わたしは知里さんからテンキグサ製のバスケットリーに関する問い合わせを受け、海外の文献を含めてまとめたものを送ったことがあった。

テンキとよばれるものは大きくわけてふたつのタイプがあり、巻き編み技法 (coil) で、上から見て円や楕円形になるように作られたしつかりとした容器と、振り編み技法 (twill) で作られた袋型のものがある。カムチャツカの先住民コリヤークの民族誌で両タイプのバスケットリーを精細に描いた文献があり、テンキグサを刈り取る時期に関する記述など、他地域の製作技術も知里さんが復元する際の参考になったようだ。

その後、知里さんはみんなくをはじめ、各地で実演や講習会をおこない、テンキ作りをひろめる活動を続けられた。わたしも二〇〇六年と二〇〇七年に、勤務していた北海道立北方民族博物館（網走市）に知里さんを招き、テンキ作りの講習会をおこなった。二〇〇七年にはテンキグサを刈り、

その葉をよりわけて天日干しするところから始め、小さな容器を作った。知里さんは、登別付近のテンキグサよりもオホーツク海岸のものの方が背丈が高く、良い材料が得られたと喜んでた。また、登別は夏に雨が多く、テンキグサの葉をうまく乾燥できない、とおっしゃっていたことも思い出す。知里さんが復元をされて以降、テンキ作りをする人も出てきたが、材料の準備から完成まで手間も時間もかかるためなのか、普及したとまでは言えない。また、歴史などわかっていないことも多い。このバスケットリーの連載を読み返し、テンキに関する世界規模での比較研究と歴史研究の可能性を改めて感じている。



テンキグサの刈りとり。網走市の海岸にて (2007年)



上：鳥居龍藏が色丹島で収集したテンキ (K0002352)。みんなくには鳥居収集のものをはじめ10点あまりのテンキがある
中：テンキグサ製と思われるアラスカのイヌイトのバスケット。1990年ごろの収集と推定 (H0227990)
下：アリュートのテンキグサ製のものと思われるバスケット。1880年ごろに収集 (H0076158)



知里真希さん (左) からテンキについて聞く筆者 (右) (2007年)

が少なく、一八八四年に北千島から色丹島に強制移住させられたときは九七人、人類学者の鳥居龍藏が一八九九年に色丹島を調査したときには六二人だった。さらに、北海道への戦後移住があり、二〇世紀なかごろに千島アイヌであることを表明する人はいなくなったとされる。そのため、千島で収集されたテンキも多くはなく、時代がわかつているのも一九世紀から二〇世紀前半までである。古くは、和人が残した江戸時代の記録にも見られるが、エトロフ、シコタン、カラフトの産物として記されるなど、今の北海道ではあまり作られていなかったことがうかがえる。

製作技術の復元

アイヌの他のバスケットリーとは異なり、テンキは製作技術が継承されていなかったが、登別市の知里真希さんが生前、二〇〇〇年ごろに復元した。知里さんは、みんなくを含むいくつかの博物館が所蔵するテンキを調査し、文献などを参考にしな